

ワカモノ交流が巻き起こす地域再発見と学び

10月のある日、山形の奥深い山村である角川の里に、大学生の若者達が30名ほども集まってきた。集落の中心にある集会場で地元のお母さん達を作る郷土料理で腹ごしらえ。そしてナタ、ノコギリ、スコップを持ち、ヘルメット、軍手、長靴を装着して外に出る。そこには地元の里山仕事に詳しいおじさん達や地元の高校生、若手の社会人が待っていた。早速裏手の山に登りながら山道を補修して散策道を作る。またぎのおじさんは山道を歩きながら、里山の植物や鳥などを捕るための罠などをその場その場で丁寧に説明し教える。大学生は途中でキノコを見つけ食べることができるのか聞いたり、山の木がどのように利用されているのかを聞いたりしている。山道の途中にある炭焼き窯に到着するとおじいちゃんが待っていて、ちょうど炭を熱い窯から出すところだ。学生達は「熱い熱い」と歓声を上げながら炭が出来上がるのを見つめる。終点はたんぼビオトープづくりの現場。スコップを手にとって、地元の若手のアドバイスを聞きながら、たんぼの畦や水路補修にいそしむ。講義室では見られない(?)学生らの熱心さとはしゃぎようを大学の先生達も、微笑ましく遠くから眺めている。夕暮れ時、自分達も手伝って一新した里山とたんぼの風景を前に記念写真。みんな満足そう。里での仕事は確かな形となって現れるものである。

以上は「山形大学エリアキャンパスもがみ」における角川の里の先生の授業風景の一コマだ。山形大学では地域と連携した研究教育活動を推進していこうという趣旨から、今年度より地域住民による学習カリキュラムに学生が参加させてもらっている。角川の里では、大学生と地域のプログラムを行い従来からの交流と学習活動をさらに促進していこうといくつかの講座を受けもち取り組んできた。こうした地域と大学との連携の試みは、地元側では地域活動の高度化や外部や若者達への発信、大学では地域貢献や活動から得られる最新の研究教育の促進といった利点が考えられ、模索の段階ながらも目下積極的に推進していこうとしている。文部科学省が認定する先進的な取り組み事例の1つともなっている。

こうした動きには、ヨソモンである若い大学生が里での活動に触れる貴重な機会をもつというだけでなく、実は地元の若者達へのインパクトがある。外部の若者達は、地域のことに関心を持ってこのプログラムに参加するので、当然、

角川の里のことを地元の若者達に質問する。そして、地元の若者達は質問に答えられない……。意外と地域のことを知らないことに気がつく。地元の若者達こそこれまでは振り向きもしなかった地域の価値を再発見することになるわけだ。そんなわけで、今年は地元の若者達から随分いろいろな動きがおこっている。それは、交流の中で得られた再発見を元に、地元には詳しい年配者の指導を仰いで里の知恵や技術を学び、自分達だけではなくより広範囲の人達にも理解できる仕方で発信していこうというものだ。そんな活動が少しずつだが具体的に活発になろうとしている。冒頭、大学生を案内していたまたぎのおじさんは「よその若者達がここのことを学びにきているんだから、地元の若手がそれを説明したり案内できたりするのはいいことだなあ」と話し、こうした若者達の動きを支援していこうという気持ちでいっぱいだ。

筆者の見るところ、近頃、集落の集会場には、なにやら里山の生き物を展示する水槽やら、その説明ラベルやら、来年度に向けた学習作業小屋やビオトープの設計図面やら、地元の若者達が作ったとおぼしき教材や計画書が増えてきた。地域と大学の連携の取り組みは、当事者の大学生のみならず同年代の地元の若者達にも着実に浸透しているようだ。こんなところにも里づくりの協同実践の成果が見られることを、うれしく思うこの頃である。